川口博久先生のご退職にあたって

千　葉　則　夫

川口博久先生との交誼は30年を超えます．昭和48年に教養部英語科に着任された先生は平成2年，新設の国際関係学部に移籍されましたが，先生から6年遅れて教養部英語科に着任した私は先生と同じ道を歩みましたので，この31年間，川口先生は私にとって一番身近な先輩でした．公私両面にわたってお世話になった川口先生について書くべき事柄は尽きませんが，ここでは先生の研究者としてのお仕事，そしてアドミニストレーターとしてのお仕事を振り返ることで，長年のご厚情に報いたいと思います．

研究者としての川口先生の業績は英語学者としてのそれと，アメリカ研究者としてのそれに分類されます．前者は東部ケンタッキーの方言についての修士論文に始まる，現地調査に基づく，もしくは著名な政治家のスピーチなどをサンプルとした，合衆国内の方言についての一連の研究であり，その範囲はアパラチア山脈地域，ニューイングランド地域，南部地域，テネシー州などに及びます．先生はそれらの地域の特徴ある諸方言を主として音声学の視点から分析されました．英語学者としての業績のもう一つに辞書編纂への関与があります．数々の英語辞典の編纂に参画された中で，角川書店『スコットフォーズマン英和辞典』では，執筆のほかに，音声学領域の編集委員として重い任務を果たされました．先生の長年の音声学への取り組みが監修者の亀井俊介博士や角川の編集スタッフに評価された結果であることは言うまでもありません．

アメリカ研究者としての先生の業績は日系アメリカ人の研究です．明治初期，カリフォルニア奥地に米本土初の日本人移住を敢行したH・スネルらの試み，そして第2次大戦期におけるユタ州での日系人迫害の状況について優れた論文を書かれましたが，日系アメリカ人研究の世界的な権威であるロ

ジャー・ダニエルズ博士の名著『罪なき囚人達』の翻訳権を取得され，南雲堂から訳書を出版され亜細亜大学の名前を大いに高められたことも特筆されるべきです.

つぎはアドミニストレーターとしての川口先生の業績です．大学を取り巻く厳しい情勢の中で本学が今日存在しえている背景に，年号が昭和から平成に変わる時期にキャンパス内で実施された，いくつかの，思い切った改革がありました.「大量留学」の名前で有名になったAUAPにしても，ネイティブスピーカーを大量に採用してスタートしたフレッシュマン・イングリッシュ（FE）にしても，そして一芸一能入試にしても，他の大学に先駆けたものであったがゆえに日本中の注目を集めることができたのです．これらの改革にゴーサインを出したのは衞藤学長であり，その決断力・実行力は評価されて当然です．ただ，衞藤学長の下で実施された改革はほとんどが，学内にあったアイディアから始まったことは紛れもない事実です．とりわけAUAPとFEの立案から実施における当時の教養部教務主任川口先生の貢献は絶大でした．先生は英語科教員のリーダー的存在として上の2つの画期的なプログラムの立案に関与されると同時に，教務主任として教養部教授会の，そして最終的には全学的な合意をとりつけられ，さらには大量の学生を受け入れてくれるアメリカの4大学との交渉窓口になられる一方で，FE担当教員の募集に応募してきたネイティブスピーカーの採用人事にも当たられるという獅子奮迅の働きをされたのです.

国際関係学部への移籍の後，川口先生は一教員として学部教育に貢献される一方で，アドミニストレーターとして全学的に大きな貢献をされました．国際交流委員長，英語教育研究所所長，副学長などのお仕事が思い起こされます．教養部英語科を離れられたのちも川口先生はFE担当外国人教員の組織である英研の所長などの激務を嫌がらず引き受けられました．お気持ちを測りかねて「もう英研所長は英語科の先生方に任せてもよいのではないですか」などと余計なことを申し上げたこともありましたが，ご自分が中心になって立ち上げられたAUAPとFEを発展させたいという強い思いがあった

のだろうと今頃になって理解できるようになりました．学内のネイティヴの教員とも親しく交わられましたし，AUAPのアメリカ側スタッフとの人間的交流も大事にされました．特にアメリカの受け入れ大学側の先生への信頼は揺るぎないもので，20年に及ぶAUAPの発展過程で必要な改革を実施できた裏には先生のアメリカ側との信頼関係がありました．歴代の学長が川口先生を頼りにし，副学長などの重要な職務を託されたのもある意味当然というべきです．

川口先生，お疲れ様でした．海外研修制度，特別研究奨励制度のどちらの恩恵にも浴することなく働き詰めの37年を過ごされたわけですので，どうか，しばらくはゆっくりお休みください．そして亜細亜大学を，国際関係学部をお見守りください．